

# 連携を分析する手法としてのPCM手法の有効性と限界

齋藤和彦（森林総研関西）

## はじめに

市民参加研究は、多様な主体による森林管理＝森林ガバナンスのあり方を考える研究である。この分野では、紛争を通して問題を発見する研究や市民参加の成功・失敗事例から教訓を導き出す研究が行われてきた。しかし、事例を巡る環境が多様であるため市民参加の方法論を考える研究には慎重であった。森林ガバナンスの構築を目指す研究としては、市民参加の方法論的な研究も求められると考える。

## 方法

ここでは市民参加を多様な主体の連携、そして連携を互いに手持ちのものを出し合いながら単独では得られない各々の目標を達成する過程＝パレート改善の実現過程とし、パレート改善の可能性を模索する方法論として PCM 手法の有効性と限界について事例研究を通して検討した。また、連携を運動論の一部として考え、社会学で用いられている資源動員論およびフレーム理論と PCM 手法との類似性について検討した。

## 結果

FASID の教科書<sup>(1)</sup>では明示的ではないが PCM 手法はパレート改善の概念を包摂した手法であり、既にできあがった連携のパレート改善性を検証する手法になる。パレート改善性を検証することで、パレート改善以外で連携に必要な要素も浮かび上がる。ただ、将来の連携可能性については、連携の接続点になるアイデアを PCM 手法で導き出せないの分析できない。その前段として各々の問題を整理する手法になる。

PCM 手法の考え方は、資源動員論やフレーム理論と類似していた。例えば PCM 手法における中心問題の選択はフレーム調整のプロセス<sup>(2)</sup>に相当すると考えられる。資源動員論やフレーム理論は、分析の手法ではなく分析の視角とされている。PCM 手法は資源動員論やフレーム理論の視角で分析する具体的な手法であると言える。

従来からの記述的分析にパレート改善概念と PCM 手法を加えることで、事例研究を系統立て、論点を明確化し、比較分析できるようになり、方法論の研究につながると考える。

## 引用文献

- (1)FASID（（財）国際開発高等教育機構）（2001）PCM 開発援助のためのプロジェクト・サイクル・マネジメント 参加型計画編．FASID，東京，63pp.
- (2)Snow, D. A., E. B. Rockford, Jr., S. K. Worden, and R. D. Benford（1986）Frame Alignment Process, Micromobilization, and Movement Participation. *American Sociological Review*, 51, 464-481.

（連絡先：齋藤和彦 skazu@affrc.go.jp）